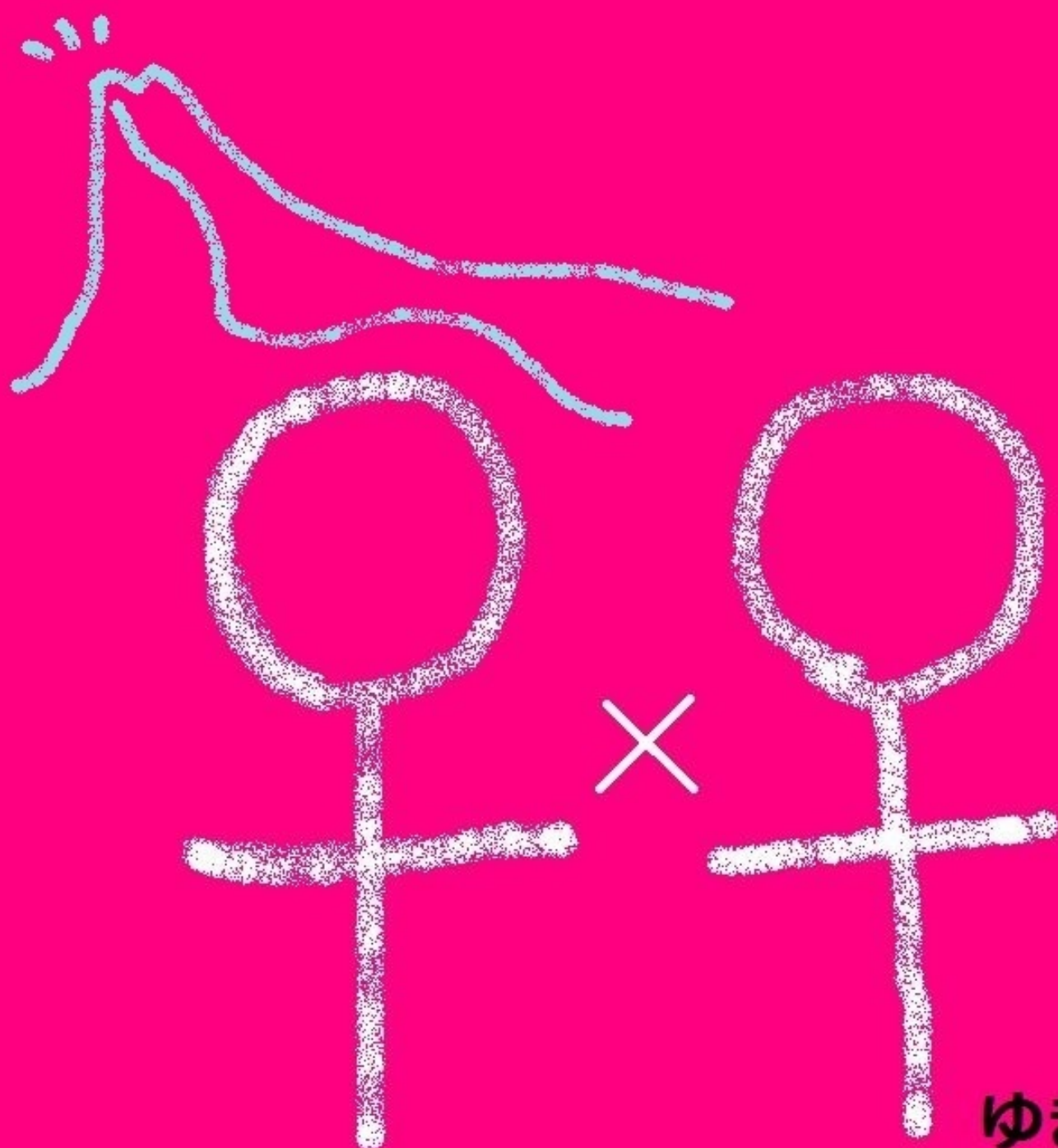


短編シリーズ

# おにやのこのカケラ

vol.4



ゆきの

(前置き少しありますのでまだパンツは脱がないでください)

## とある名所

---

私の心は、もう、決まっていた。

あとは、そう、あの場所へ行って、ただ頭の中でイメージした通り、一步を踏み出すだけだ。

山道を登る途中、いつもの癖で持ってきてしまったアパートの鍵を適当に草むらに放り投げた。  
これでいい。財布もカード類も社員証も全部アパートに置いてきたから、もう、準備は、出来た。  
この名所に来た痕跡も残していないはず。多分、私は、永い間「行方不明」でいられる。  
そう思っていると、驚いたことに、背後から声をかけられた。

「鍵、落としましたよ」

おせっかいな人はどこにでもいるものだ。小さな親切と言うやつか。

「スイマセン、ありがとうございます」

世話好きのおばさまかと思ったら、案外若い女性が鍵を手渡してくれた。  
年の頃は……まだ三十路に届かないといったあたり。

「おひとりですか？」

彼女は、表情を窺うようにして私の顔を覗きこんでくる。

「ええ。友人と来るはずだったんだけど。都合が悪くなったって言って」

どうせ、この場限りのつき合いと思って、適当にはぐらかしておいた。  
すると彼女は、隣に来て私に歩調を合わせて歩き出した。  
地元の人なのだろうか。めんどくさいことになってしまった。  
どうしようか、考えながら山道を登り続けていくと、しばらく黙っていた彼女が、遠く前方を指差した。

「あそこにある山小屋で、休憩しませんか？」

その提案に困って、私は、ああ、だとか、ええ、だとか、曖昧な返事をした。  
やがて足を進めると、山小屋が近くに見えてきた。登山客のトイレ休憩用にしては立派過ぎるし、  
一軒だけぽつんと建っているの、宿泊用のロッジというわけでもなさそうだ。緊急時の避難用だろうか。

「この辺、詳しいんですか？」

彼女は、山小屋を知り尽くしているかのように、迷うことなく玄関のドアを開けた。

「ここは、あたしの家です」

「は？」

「冗談です」

笑うところなのか、なんなのか、彼女は無表情でそう言って、床にリュックを下ろした。  
私達は入ってきたばかりなのに、暖炉には薪がくべてあって、ちょうどいい温かさになっていた。  
彼女の存在も、この山小屋も、なんだか全てがミステリアスで、本当に現実なのかと疑いたくなる。  
私が、一番気にしているのは、せっかくの決意した計画に邪魔が入ったことだった。

「疲れてるんじゃないですか？ 体、冷えてるでしょう。ベッドも温まっていますよ」  
「ベッド？」

彼女が指差すドアの向こうは、確かめてみると確かに寝室で、ダブルベッドがあって部屋も暖かだった。

「どうぞ」

と、彼女はベッドルームに私を通してくれた。

ベッドの上にひざ立ちになった彼女は、上着を脱ぎ始めた。

ダウンジャケットに、セーター、薄手のシャツ……。

次々に服を脱ぎ捨てていき、チノパンとストッキングまで脱いで、淡いピンクのブラとショーツだけの姿になって。

「どうぞ」

と、ベッドにもぐりこんで布団の端を私のほうに持ち上げた。

そして、私が呆気にとられている表情を楽しんでいるかのように微笑むのだった。

「え……いや」

どうぞ、と言われても、この状況で男性なら、喜んで布団にもぐるのかも知れないが、私は生憎と女である。

私はロングヘアだし、私が男に見えたという線もありそうにない。

「あなたは、女性が……好きなの？」

「うーん。そうね」

「それは、つまり、私と、セ、セックスをしたいと、そういうこと？」

「そう」

どうしたらいいのだろうか。

とりあえずは、自分も上着だけ脱いで、暖炉のそばの椅子に腰掛けてみたが、考えはさっぱりまとまらない。

考えあぐねていると、彼女は言った。

「いいじゃない。最期に珍しい体験の一つや二つしてみても」

私は、ハッとして彼女の方に向き直ると、彼女は飛びっきりの笑顔を私に向けていた。

全部、分かっていたのだ。彼女は。私がこの「名所」に来た理由も。

しかし、すぐさま、どうでもいいやと思った。彼女の言う通りかもしれない。

……何より、彼女の笑顔は、可愛らしかった。

「私は、女性経験、は、ないんだけど」

「あたしはあるから平気よ」

そんなもんなのか……。

私は、複雑な気持ちでベッドに入った。

彼女の手には捕まると、厚手のシャツもブラウスも、あっという間にボタンがはずされてしまう。キャミソール越しに私達は正面から抱きしめあった。柔らかな胸の感触は初めてだが、悪くもない。やがて、ブラのホックもはずされて、彼女は、私の胸に顔をうずめてきた。くすぐったくて、何日ぶりかに笑った。

「ほら、下も」

「脱ぐの？」

「全部」

彼女は、当然、と言うように、私の服を全部剥ぎ取ってしまった。全裸になって、シーツの波に身を投げた。少しでも、体を隠したくて毛布をかぶっていると、私の背後から彼女がぎゅっと抱きついてきた。

「……なんていうの？」

耳元で、彼女がささやく。

「え？」

「あなたの名前。何て呼んだらいいかな、って」

「……ひとみ」

言ってしまうから思った。こんなときに正直に答えなくても偽名でもよかったのに、と。

「あたし、ミキ」

彼女も本名かは、分からないが。確かに、これで呼ぶには困らない。

ミキは、私の胸をこねていた手で、乳首を少し強くつまんだ。

「……んっ」

「ひとみは乳首、好き？」

頷くと、何度も胸の突起をつねられた。男性相手では感じたことのないような快感を、私はすでに感じ始めていた。するりとミキの手が太ももの間を探った。

「ホントだ。もう濡れてる」

「ま、待って！……あっ」

指先を、動かされると、クチュリと濡れそぼった音がした。

「ひとみ、濡れやすいんだね」

ミキはなんだかうれしそうに笑っていた。

感じるところにミキの指が当たっては離れを繰り返していて、

私の方は絶妙に焦らされた感覚に翻弄されているというのに。

声が出そうになるのを堪えていると、私の体は仰向けにされ、ミキが唇を重ねてきた。

私の乾いていた唇の表面をペロリと舐めてから、舌を口腔内に忍ばせてくる。

少々強引に暴れ過ぎる舌に驚いて咄嗟にミキの舌を噛んでしまった。

ちょっぴり血の味がして。あわてて謝ると、一瞬ミキは考えるそぶりを見せ、

「大丈夫」

と、また笑った。先程より、なんだか力のない笑いに思えた。

ミキが何も言わずベッドを下りたので、怒ったのかと不安に思っていると、彼女は口元だけにやりと笑って先ほど脱いだストッキングを手にベッドにあがってきた。

地味なセックスしか経験のなかった私は、ミキが何を考えているのか全く考えも及ばず、されるがままになっていた。

「腕」

「ん？」

「あげて……そう」

ぼんやりしていたら、私の両手首はストッキングで縛られ、おまけにベッドの木枠にくくりつけられてしまっていた。

手の自由を奪うと、ミキは嬉しそうに笑った。

「縛られるの、初めて？」

「そりゃ、初めてだよ……」



もう、下半身を毛布で隠すことも出来ない。  
全身があらわになって、気恥ずかしさで横を向いた。

「恥ずかしいなら……」

ミキは、ほら、これ、と、どこから出してきたのか、アイマスクを私に着けた。  
視覚が奪われると、他の感覚はどうしても敏感になってしまう。  
丁寧に私の肌を指先でなでる感触が心地良くて、吐息が弾んだ。

「ひとみの下、綺麗にしちゃおうか」

「え？」

力が抜けてきていた私の両膝を抱えて、足が開かれた。  
潤っているところもすべてみられていると思うと頬がかっと熱くなった。

「あ！……な、なに？」

アンダーヘアに、ジェル状のものがどろりと塗りつけられ、その冷たさに痛いほど緊張した。

「綺麗にするから、動かないでね。カミソリで怪我しちゃう」

ミキは私のアンダーヘアを剃ろうとしているところだった。  
長い部分のみじかめにカットしているのか、チョキチョキとハサミの音がする。  
私の心境は、もう、どうにでもなれ、という気になっていた。  
カミソリに持ち替えたミキが、私のアンダーヘアの上端部分から、丁寧に刃を滑らせていく。

「気持ちいい？」

楽しげなミキの声が問う。

「どうなってるか、分からないけど。カミソリ、怖いし……なんか変な感じ」

目で確認は出来ないが、足の間は、どんどんスースーしてきて、やがてすっかり剃られてしまったようだった。

「うん、可愛い。クリちゃんがちょこんと飛び出てる」

温かな蒸しタオルで拭いて、彼女は満足そうにそう言った。

剃毛が終わる頃には、私のあそこは自分でもはっきり分かるほどに熱くなっていた。

ミキは、可愛い、可愛い、と、飛び出ている突起を指先で転がした。

膝の裏から足の指先に電気が走り抜けるような強烈な快感が何度も襲う。

「あっ、だめ！」

「いいでしょ？だって、たってるもん」

ミキがクリトリスに直接口づけ、ちゅぱちゅぱと吸うように愛撫すると、膝ががくがくと震えた。

ダメ、とか、いいとか、叫んで、気づけば夢中で腰を揺らしていた。

もう、限界はそこまで来ている。同性の人にいくところを見られるなんて思いもしなかった。

恥ずかしくても、両腕は固定されていて、両足は彼女にがっちり掴まれている。

包皮越しにクリを何度も強めにぎゅっつつままれ、私は嬌声をあげるしかなかった。

「もう、だめ……え」

「いいよ、ひとみ」

ミキの言葉と同時くらいに、私は体全体を小刻みにふるわせて達していた。

こんな深い快感の海にもぐる事が出来たのは初めてだったかも知れない。

荒い息も整わないうちに、ミキは、私の左足首をひょいと持ち上げ……。

そこで、アイマスクがはずされた。彼女も興奮し頬を紅潮させている。

今度は何をするのかと思ったら、いったばかりでびっしょりになっている私のあそこに、

彼女は自分の秘部をぴったりとこすり合わせた。

すぐに濡れた音が聞こえて、ミキも感じていることが分かる。

「んっ……あ」

うっとりとしたような声を上げて、体をくねらせるミキは綺麗だ。

しばらく腰を動かしていたミキはいったんベッドから降り、ベッドの下のスペースを覗き込んだ。

次の瞬間彼女が手にしていたのは、レディコミなんかでしか見たことのない凶器だった。

私が、それを怖がっているのを見てとったミキは、

「大丈夫。いっぱい濡れてるから、痛くないよ」

と、笑った。

「それ」は、レズビアン向けのものらしく、片方が太めで長く、片方が細めでやや短い構造をしている。

ミキは、私に見せるように、自分のピンク色の粘膜を開き、太い方の突起を中に沈めていく。奥まで入ると、彼女に男根が生えたように見えて怖くなった。

私の足をしっかり抱えて、ミキは、

「力抜いて」

というともう片方の突起を私のほうに挿入していく。彼女の言うとおりに、痛みはなかった。また、私の片足を持ち上げ、アンダーヘアがなくなって直に触れる粘膜と粘膜をこすり合わせて、

「ああ……」

と、ミキは熱い吐息をゆっくり吐く。そして、中に入っているもののスイッチが入れられた。振動は、低くうなってリズムカルに私の内部を攻め始めた。

「な！これ、すご……い」

ミキの方も、振動をMAXまであげてしまうとさすがに余裕はないらしく、切なそうな表情で夢中で腰を動かしてくる。

振動音と、濡れた粘膜のこすれあう音、そして二人の声が混ざり合ってベッドルームは異様な熱気に包まれた。

「あっ！……そこ、やっ、なに？」

内部の振動は、襞の浅いところを探り当て、私は下半身にぐっと熱いものがこみ上げてくる感覚を覚えた。

「ここ、いいんだね」

ミキは、嬉しそうに言って、執拗にその部分をえぐるように腰を動かしつつけた。

「ミキ！ダメ！だめ、だから……」

「もらしてもいいよ」

口ではだめ、といいつつも、私の中はどんどん熱をもってきて何かが出そうな感じがした。尿がもれそうな感覚にとてもよく似ている。

「少し、力入れてみて」

「あ、なんか、……ああ！あ、あんっ！」

もう、快感に翻弄され声を気にすることも出来ず、私は、とても熱い、何かをもらしてしまった、気がした。

「すごい。潮吹いちゃった」

ミキも、いくことができたのかはわからなかったが、満足そうに、ゆっくりと器具を抜いてくれた。

潮を吹く、とか、都市伝説だと思っていた。自分の身に起きたのだとはにわかには信じられなかったが、ミキが腕の戒めを解いてくれて、ベッドのシーツを見ると、確かに一部分だけ、ぐっしよりと濡れている。

ミキは、そっとキスをして、

「気持ちよかった」

と、耳元でささやいてくれた。

ふふっ、と笑って、ミキは私の全裸の体のラインを指先で、ゆっくりなぞり始めた。

「ねえ？」

「え？」

「女の子とするの、どうだった？」

ミキは私の顔を見て、にまにま微笑んでいる。完全に面白がっている。

「まあ、まあ、か、な」

「そうなの」

二人とも、服を着て落ち着いた頃、私は、ミキに聞いてみた。

「ここで、いつも誘ってるわけじゃ、ないよね？」

「まあ。ひとみが初めてではないけど」

「どうして、私に声かけたの？」

「だって。この先のこと気にしない人じゃないとね」

ひとみの答えの意味が分からず、さらに聞いてみる。

「この先のこと？」

「ここはほら、名所でもあるから」

「永く一緒にいたい相手を探すには不向きじゃない？」

「あたし、A I D Sだからね」

それを聞いた瞬間、私の脳みそは凍りついた。

「うつつたら……」

「家の鍵捨てるような人ならいいかなって思って」

ミキが全く悪びれずにそういうので、私の頭は完全に思考停止に近くなった。

「心配なら、3ヶ月たってから保健所で検査してもらえばいいよ」

「3ヵ月、って……」

「陽性反応が正確に確認されるまで、それくらいかかるからねえ」

私はその後、ミキに交通費を借りて自分のアパートに戻った。

3ヵ月後にH I Vの検査をしてもらったが、陰性だった。

彼女が、私の企図を察して止めようとし、A I D Sだと嘘をついたのかどうかは、分からない。

ただ、自分がA I D Sで死ぬかも知れないと思った時、不思議と生きたいと思ったのは確かだ。

お久しぶりです、ゆきのです。  
生存確認のため、ショートショートでもと思って、  
書き始めたのはいいですが、  
エロエロが書きたくってどんどん長くなっちゃいました。  
ここまで読んでくださってありがとうございました。

今回は、一応18禁指定にさせていただきます。

※加筆訂正、18禁指定解除の上、2月17日再公開

おにゃのこのカケラ vol.4 「とある名所」

<http://p.booklog.jp/book/44815>

著者：ゆきの

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yukino0705/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44815>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44815>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.